

チェルノブイリの汚染地域には未だに多くの人々が住み続けている。ウクライナでは1Km²当たり15キュリー以上のナジチ、オブルチなど強制移住対象地域になを3000世帯が住んでいる。自発的移住対象地域（希望者は移住）の5~15キュリーの汚染地域には84万人の人々が生活している。これらの人々の間には、良く知られているように甲状腺がんや免疫力低下による様々な病気が増えている。しかし、もっと恐ろしいことが人々の未来を脅かしはじめていることが明らかになりつつある。世界的な権威のある英国の科学雑誌「ネイチャー」の今年4月25日号に載った論文

に、私は来るべきものが来たと思った。

ロシア科学アカデミー、英国レスター大学遺伝学部、ベラルーシ放射線医学研究所の研究者らの共同研究のその論文では、ベラルーシの汚染地域モギリョフ地方の子どもたちの遺伝子に突然変異が高い頻度で起こっており、その度合いはセシウム137の土壤汚染と相関がある、という。調査対象地域の汚染レベルは1Km²当たり1~15キュリーで、6.8キュリーが最も多かった。突然変異の発生率は非汚染の対象地域と比べればその差は歴然としている。上に述べたように、これよりはるかに汚染のひどい地域にたくさんの人々が生活しており、こうした結果は汚染地域人々の未来に暗い陰を投げかけるものである。被害は病気にとどまらず人類の存続にまで関わる問題なのである。

チェルノブイリ原発近く

子供の遺伝子に多い突然変異

【ロンドン25日高島屋】チェルノブイリ原発の近くで生まれた子供は遺伝子に突然変異を起している確率が高い、との研究結果が二十四日、ロンドンで発表された。英科学誌「ネイチャー」最新号に掲載される。

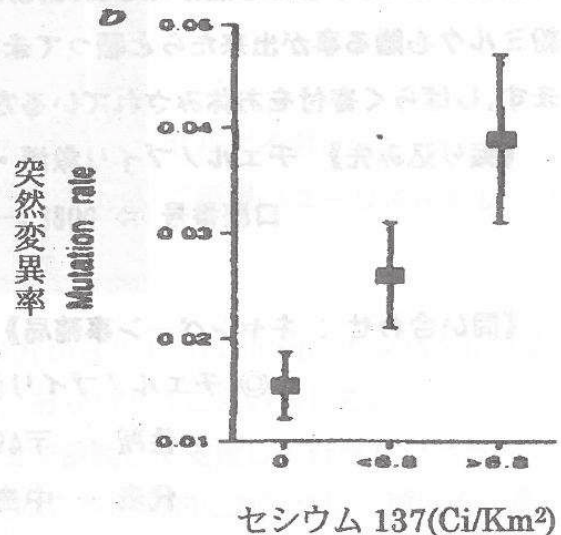
放射線が原因 初めて確認

研究をまとめたのは、英レスター大学の遺伝子学者の権威、アレック・シエラ。英誌に掲載されたのは初め

研究をまとめたのは、英レスター大学の遺伝子学者の権威、アレック・シエラ。英誌に掲載されたのは初め

一方、同原発事故とほまつた関係ない英国の家族百五組を調べて、同様の調査し、両グループを比較した。その結果、ベラルーシの汚染地域には、英国の約二倍の遺伝子突然変異が見られる七十九家族を対象に、同

この発表は、遺伝子情報として組み込まれ、次世代に引き継がれていく、と両親は驚いている。



Human minisatellite mutation rate after the Chernobyl accident (Nature : 1996年4月25日号)